

昭和60年編

プロレス界は離合集散の連続。そんな中遂に千里眼はその相棒と邂逅。

- 1 1985年2月5日 全日本プロレス 東京体育館大会  
ジャイアント馬場対タイガー・ジェット・シン  
ジャンボ鶴田・天龍対マサ斎藤・長州力

遂に新日マットで人気絶頂の長州力が全日本プロレスに軍団ごと参戦。鶴田・天龍との抗争をスタートさせた。その最初の山場がシリーズ最終戦の東京体育館でのタッグ頂上対決。

しかし4人がリングに登場してにらみ合った瞬間、千里眼は同行者に言った。

「こりゃ、体格が違いすぎる。これで互角なんてうそだ。」

とにかく鶴田・天龍はでかかった。後に新日のドームに鶴田が参戦したときにも、この点を指摘したマスコミがあったが、とにかくひとまわりも体格がちがうのに勝てるわけがない。しかも相手はふたりだ。

ジャイアント馬場が「とにかくデカイやつをレスラーにする」というポリシーがあながち間違いではないことがビジュアル的に証明されたシーンとして記憶に残っている。

しかしまあ諸事情あったらしく、この後しばらくはあたかも両軍互角のような攻防を続けていたがむりが生じるのは当たり前。結局、長州軍は全日マットを去ることになる。

前座でジプシー・ジョーがグラン浜田にピンフォール負けしたり、メインでもシンがギブアップ負けと外人勢は長州達がやってくるとなぜか受難の憂き目に会うのだが、全日外人はやられてばかりじゃなかった。大逆襲は次の両国大会でおこる。

- 2 1985年3月9日 全日本プロレス 両国国技館大会  
ジャンボ鶴田 天龍対ザ・ロードウォリアーズ  
長州 谷津対B・プロディ K・ブルックス  
キラー・カーン 栗栖対H・レイス C・ワラス  
タイガーマスク対小林邦明

全日外人のなかでも、あくの強すぎた男というかエゴの固まりみたいなやつそれがブルーザー・プロディだった。とにかく自分が主役じゃなければ気が済まないタイプの人間がどこにもいるとはいえ、万が一主役になれない場合に実力行使で相手を排除するかどうかは別問題。この日は目障りな長州組との直接対決が組まれた訳だが、ロード・ウォリアーズという新しい外人スターの登場もプロディの危機感を煽る材料だっただろ

う。ウォリアーズは当時、テレビ東京の「世界のプロレス」というアメリカの映像を紹介する番組から生まれたスター。久々の大物外人スターは全日本のテレビに初登場がいきなりのタイトルマッチ。たしか来日第一戦はどこかの地方で行われ対戦相手のアニマル浜口がKOされてしまい、せっかくの地元国技館大会は欠場というおまけがついた。ウォリアーズ人気にプロレス初使用の両国新国技館ということで話題沸騰、会場は超満員。またなにをやっても「ワー」「オー」の観客総興奮状態がはじめて全日でも起り第一試合から盛り上がりっぱなしであった。

そんな中、目障りな長州軍団に満座の中でぎゃふんと言わせようと外人勢はプロディ以外もはりきっていたが、その一番手がレイスだった。

かわいそうだったのはレイスに顔面パンチ連発されたキラー・カーンだった。カーン組はろくな技もさせてもらえずに試合は一方的レイスペースで終わった。

さて問題のプロディ組対長州組のタッグ戦。おそらくレイスの試合ぶりの情報はプロディにも伝わっていたろうから「そうか、きょうは長州達を引立てなくてもいいんだな。」とばかりフルスロットルバージョンで鎖片手に客席になだれ込んでくるプロディ。

そして問題のタッグ戦。とにかくプロディは一切長州の技を受けないで、なぐり、蹴り、暴れまくった。ブルックスが長州のラリアートを食らう形でかろうじて試合が成立したが、会場の雰囲気では全日外人勢の長州軍への大逆襲が好評だった。

千里眼も正月シリーズでは小鹿や大熊にも実は地方の試合で手を焼いていたらしい長州達に全日外人勢がフルパワーでいったらもろいもんだ、と満足したものだ。

ところがあんなもんじゃプロディの腹の虫はおさまったわけじゃなかった。

ウォリアーズは、「まあ、あんなもんかなあ。」そんな感じだ。

### 3 1985年4月18日 新日本プロレス 両国国技館大会

アントニオ猪木対ブルーザー・プロディ

藤波辰己対ストロング・マシン

坂口征二対ビリー・ジャック

プロディの腹の虫は全くおさまってはいなかった。主役になれない苛立ちは逆噴射で新日本プロレスに暴れ込むという発想になった。

新日に見れば長州軍やキッドなど大量に選手を引き抜かれ大ピンチだったがこれで息を吹き返したわけだ。そして新日も両国国技館大会を開催することになったわけだ。結果としては猪木をもってしてもプロディからピンフォールは奪えなかったのだから、

プロディという男、そうとうな実力の持ち主だったのか、単に融通が聞かないだけだったのか、おかげで猪木も馬場もこの後プロディに振り回されつづける。ちなみにリング上でプロディから完全フォールを奪うのは“最強”のジャンボ鶴田の登場を待たなければならなかった。

4 1985年5月31日 (旧)UWF 後楽園ホール大会  
スーパータイガー対藤原嘉明  
高田伸彦 ジョー・ソルコフ対山崎一夫 ピート・ロバーツ

この時代、実は全日と新日以外にもうひとつの団体があった。それがUWF。前年に旗揚げしたが、猪木の参加問題やら新聞寿の参入・離脱で揉め事のデパートと化した団体が最後に打ち出したのが「格闘技スタイル」とでもいうべきもので、これが一部のファンにうけはじめ、後楽園ホールだけはいつも満員マークが付いていた。

今にして思えば単なる道場のスパーリングでしかないものだったが、ロープワークを否定するというのが「本気っぽい」雰囲気だと未熟なファンに思われた。

で、その中でもSタイガー対藤原が一番の人気カードというわけだったので、「どんなもんかいな」と千里眼は覗いてみることにしたわけ。

まあ確かに「痛そうな」プロレスではあった。それだけ。そんな中で目を引いたのがほとんどカール・ゴッチ丸写して雰囲気のジョー・ソルコフ。後のジョー・マレンコだが、この日はインディアンデスロックなどというものをやったりしていたので「やろうと思えばプロレスの技も掛かるのか」と千里眼は思った次第。

ソルコフはこの後、意外なリングで意外な相手と名勝負を繰り広げることになるのだがそれはもう少し後。

また“打倒佐山”に思わぬところから名乗りが上がり、千里眼はそいつの実力を確認するために別な格闘技の会場にも出動するようになる。

5 1985年6月21日 全日本プロレス 日本武道館大会  
ジャイアント馬場対ラッシャー木村  
天龍対長州力  
タイガーマスク対小林邦明  
阿修羅原対ハル園田

日本人抗争に再び山場が来た。

しかしカードを見れば解るとおり、ジャンボ鶴田がメインカードに名を連ねていない。古くは国際プロレスとの対抗戦でも全日は最後までフルメンバーでやらなかったが、今回も鶴田ぬきでは決着はつかない。

そんな中、突然姿を現したのは“豊登”風な理由で失踪中だった阿修羅原。無差別攻撃の乱入を繰り返し、この日は全日軍のハル園田が標的というわけ。ハル園田はその後、航空機事故で亡くなるのだが、存命ならノアや全日の風景にどう影響したろうか。

「アーシュラー」の繰り返しが耳障りなテーマ曲で原は登場し、ウォリアーズ風な“秒殺マッチ”で勝利した。まだ体調不十分なので長時間ファイトが出来ないだけのことだったらしいが、原の存在がクローズアップされてくるのはもちろん長州達が全日を去ってからのこと。

ところでこの日負傷つづきの三沢タイガーが遂にシングルで小林邦明に破れてしまう。ところがなんとリングサイドからひとりの男が登場し小林と乱闘を始めたのであった。誰だと思えます？

引退したはずの大仁田厚。

小林への挑戦はなぜか一切無視されたが、大仁田もその後この大河ドラマに登場してくることになろうとは千里眼、想像すらできず。

6 1985年8月1日 新日本プロレス 両国国技館大会  
アントニオ猪木対ブルーザー・プロディ  
藤波辰己対ジミー・スヌーカ

この日は千里眼が当時勤めていた会社でなぜかぞろぞろいたプロレス好きが大集合した日でたしか3マスほど買い占めたはず。

で、各部署仕事が片付いたところから会場入りするので選手同様、マス席もメンバーが揃う度に大騒ぎ。

「おー、お前も来たか」「あいつはまだか」「ビール買ってきまーす」まるで花見会場。そんな中、新人でプロレスにスゴイ詳しいやつが来ます、という話を営業あたりから聞いていたので千里眼は、誰それ？って感じだったのだが、来ましたよ、スゴイ詳しい新人が一番最後に。

今回記録を調べたら意外にも千里眼と相棒はその後、あまり時間が合わなかったのか本格的に観戦がスタートするのは翌年のUWFの出戻りを待つことになる。

あっ、猪木対プロディその他の内容ねえ。

千里眼 一行の桝席でオオウケだったのはストロング・マシン1号対3号の仲間割れ決着戦の乱戦マッチだった覚えがある。

なにせ“花見状態”だったから賑やかなのがウケルわけだ。

#### 7 1985年8月 全日本プロレス 両国国技館大会

鶴田 天龍対S・ハンセン T・デビマス

ザ・ファンクス対長州 谷津

タイガーマスク対小林邦明

なぜか大仁田の小林邦明への挑戦は一切無視され、負傷癒えた三沢タイガーが復讐戦を挑んだのがこの日の両国。

ところが負傷が癒えたのはともかく体格がヘビー級になってしまった三沢タイガー。当然、小林からベルト奪回。今にして思えば早めにジュニアチャンピオンを卒業して、ヘビー級王者を目指す戦略は正しかったと言えよう。今や三沢光晴はプロレスをやったら日本一とっていいだろう。

またこの日披露した“ハーフネルソンスープレックス”は現在は小橋健太の得意技。

2003年5月の新日本の東京ドームでは5連発で蝶野正洋をKOした。

#### 8 1985年10月21日 全日本プロレス 両国国技館大会

リック・フレアー対リック・マーテル (NWA・AWAダブル世界戦)

鶴田 天龍対ロード・ウォリアーズ

長州 谷津対マスカラス A・クルーズ

タイガーマスク ザ・ファンクス対B・ロビンソン T・ゴディ C・ゲレロ

全日の試合中継がゴールデンタイムに復活。たしか土曜の7時から1時間番組に昇格したと記憶する。それを記念して行われたのがこの日の両国大会。たしかスポンサーの中にはニッサンがあったはず。ニッサンマネーも大量に出たのか、外人勢は超豪華。この観戦記では最初で最後のドリー、ロビンソン、マスカラスの揃い踏みがあり、また実現は夢のまた夢と言われたNWAとAWAのダブル世界戦が本当に実現したわけだ。まあニッサンにしてみればライバル、トヨタのサッカーToyota Cupに比べれば安いものだったんだろう。

ちなみにNWA、AWA、WWWFの3大アメリカメジャー王者のダブル戦は本国でもこの頃いくつかの組み合わせが実現している。

レイス対ボブ・バックランドのNWA対WWWF。ボブ対ニック・ボックウィングルの

AWA対WWWF。古くはプエルトリコでジャック・プリスコ対ペドロ・モラレスの  
NWA対WWWFがモラレスの凱旋試合ということでアメリカには極秘で行われたとか。  
しかし鉄人ルー・テーズのようにリング上の実力で統一を果たすものはもう出ないだろ  
う。日本でも力道山のように日本選手権をかけてリング上を統一出来た時代もあったこ  
とはあったのだが・・・。

現在では資本とテレビの力でピンス・マクマホンがアメリカマットを統一している。  
だとすれば当時ジャイアント馬場が日テレとニッサンの協力でやろうとしていたことも  
あながち間違いとは言えないかもしれない。ただアントニオ猪木という男が異常なまで  
にしぶとい、そして日本マット統一という同じ野望に燃えすぎていたため成功しなかつ  
ただけのこと。そして秀吉と家康のように長生きした方が勝ち残ることになるうとは。

9 1985年11月11日 ジャパンプロレス 後楽園ホール大会  
長州 谷津 小林対マシン 高野 ヒロ斉藤

ジャパンプロレスとは長州軍が所属するプロダクション。長州達は全日本に入団という  
形をとっていなかったのである。全日に入団するのはハードルが高いのか、馬場さんの  
奥様に気に入ってもらえるのがむずかしいのか理由はわからないが、たとえば日プロの  
残党も入団ではなかったらしいし、タイガー戸口も外人扱いだったらしい。また柔道王  
アントン・ヘーシンクは日本テレビと契約していたので厳密には「日本テレビ所属」な  
わけだ。

この税金対策みたいな、あるいは契約金2重どりシステムみたいなことを始める連中が  
さらに3人現われて、それがマシン達の「カルガリーハリケーンズ」という訳だ。

試合のほうは日まぐるしく動きまくりラリアート連発の長州スタイル、それだけのこと。  
ただ全日陣営にあまりにも選手が集中し過ぎ、試合タイムが短くなる、不透明決着が  
多すぎるなど弊害のほうが目立ち、そしてまたプロレスお決まりの分裂騒動に発展して  
いく。実はジャイアント馬場陣営も猪木側以上に分裂騒ぎがこの後複数起こる。

10 1985年12月12日 全日本プロレス 日本武道館大会  
長州 谷津対S・ハンセン T・デビアス  
ジャンボ鶴田 大龍対ジャイアント馬場 D・ファンク Jr  
H・レイス J・バー対D・キッド D・スミス

年末恒例の最強タッグ最終戦。例年の豪華外人勢に加えて今年は長州軍も参戦で、当時の熱戦譜を改めてみると引き分けのオンパレード。この日の3大カードも結果的には全部引き分け。とにかくどうやって引き分けるか、そればかり。

そして完全決着を見たいなら新日本へいらっしゃいとばかりに翌年から新日陣営では「新日本対UWF」がスタートする。